

Ⅶ 要 約

養 魚 学 報

- (1) 大分内水魚試(1977)のスッポンの疾病は、細菌性疾病、ムコール病、ひふぐされ病、付着性繊毛虫生、餌料性疾病と多いのに対し、当地方のスッポンの疾病は、細菌性疾病、ひふぐされ病、付着性繊毛虫寄生と少なかった。
- (2) 昭和47年度～50年度におけるへい死量の調査の結果、冬眠あけの2.3月に水温が上昇すると、8月下旬ごろから9.10月にかけて水温が下降するころにへい死の山がみられた。51年度に水質調査を行ったが、へい死との関係はみいだせなかった。
- (3) 健康及び罹病体、環境飼育水及び泥土より細菌分離を行った結果、罹病体及び水温上昇期、水温下降期に池水から主に分離され、よって *Aeromonas* が最も疑われるが、多方面からの総合的検討 *Aeromonas* が行わなければ原因を明確にするのは困難であると思われる。
- (4) *A. hydrophila* に対するBAY 9391の薬効試験の結果、接種菌数 10^6 に対し、BAY9391-25 μ g/kg \times 2日投与で薬治効果がみられた。
又、ニフルスチレン酸Na、クロラムフェニコール、ナリジクス酸、スルファモノメトキシンNのMICはニフルスチレン酸Na、クロラムフェニコール、ナリジクス酸、スルファモノメトキシンNaの順であった。スルファモノメトキシンNaは耐性化しやすいように思われた。
- (5) ヘマトリット値及び血清タンパク量の健康値の目安はHtが25-35%でSPが4.0-6.0 g/dlであった。異常値はHt、SPとも広範囲になるのが特徴的で、*Aeromonas* 人工感染試験や絶食試験においてHt、SPとも健康値より低くなる傾向がみられた。

Ⅷ 残された問題

現在までの調査の範囲では疾病の原因は、はっきりせず予備調査区域を出ていない。
今後、(1)症状の把握、分類、(2)それらが、何に起因するのか(細菌、ウイルス、カビ等)、またそれらがどのように複合感染しているのか、(3)病理組織や血液性状、(4)治療剤投与による耐性菌の問題、(5)実験動物としてのスッポンの問題、(6)スッポン自身の生理学的問題等、多方面からの総合的研究が必要である。